

はじめに

「桃栗三年、柿八年、ユズは大馬鹿十八年、人は百でも成りかねる」

という古くから伝わる歌がある。この歌の背景には「人間とは、自分の一生をかけて成仏する（人間になる）ために歩むもの」という仏教の文化がある。

ユズは十八年もたたぬと実がならぬとは言うが、しかし「百でも成りかねる」人間よりも勝^{すぐ}れているかもしれない。

なぜ十八年もかかるかと問えば、ユズは木が成長していくうちに、自分はさて、ミカンだったか、カラタチだったのか忘れてしまうからだという。だから「大馬鹿十八年」という。では「百でも成りかねる」人間は何と言えよいだらう。

ユズが実をつけぬときは、沢山なっているユズの実を持ってきて、実のならぬユ

ズの枝にチクンチクンと突き刺すとよいという。突き刺された木は、ビツクリして、アツそうか私はユズだったと目を覚まして、翌年からボツボツ実がなるといふ。

これは単に、昔の笑い話ではなさそうである。これはユズにことよせて、仏法の世界、つまり人間の目覚めをうながしているのである。せっかく人間として生を受けながら、自分は何だったのか忘れ果てている私に、チクンと呼びかけてくる話である。

昔から「真宗」は、農村（家が基盤であると言われる）で育ってきた。それはどういふことかと言え、今から三十年前の農家は、機械がなく、従って家族が労働力であったため、三世代、四世代が一緒に暮らして共同作業をしていた。

その中で、赤ん坊が生まれる、逆に家族の誰かが亡くなる。その悲しみや、喜びを通してのちの尊厳を肌で感じ、嫁姑という人間関係の煩わしさを体験して、自分の正体を教えられながら、辛抱することも我慢することも、相手の身になることも出来る、深いやわらかな人間、つまり「真宗人」が、誰が教えるともなく育ったの

であった。その原点にお内仏があつたことは申すまでもない。

今日、高度経済成長で農村が消えると共に真宗も消えつつある。

これで教えられることは、真宗はお寺の教化活動だけで支えられてきたのでなく、農家の生活、つまり、三世代、四世代の煩わしい人間関係の中で念仏が生活化され、真宗人を生み出し続けながら、真宗をたもち支えてきたのであるということである。

真宗大谷派では、今から四十数年以前に「同朋会運動」といふ信仰運動に立ち上がった。その出発時のスローガンは、「家の宗教から個の自覚の宗教へ」であった。

宗教はあくまでも「個の自覚」つまり「一人一人のしのご」でなくてはならないが、その一人一人のしのごが抜け落ちて、単なる因襲に止まってしまった姿を「家の宗教」といふ表現で批判したものは十分理解できる。しかし、今日、「家」が「人間を生み育てる」といふ機能を全く失ってしまった現実に直面して、改めて「家の宗教」をただ単に因襲だと否定するだけでなく、「家の宗教」にまでなつて果してきた意味を見直してみなければならぬと思うが、どうだろうか。